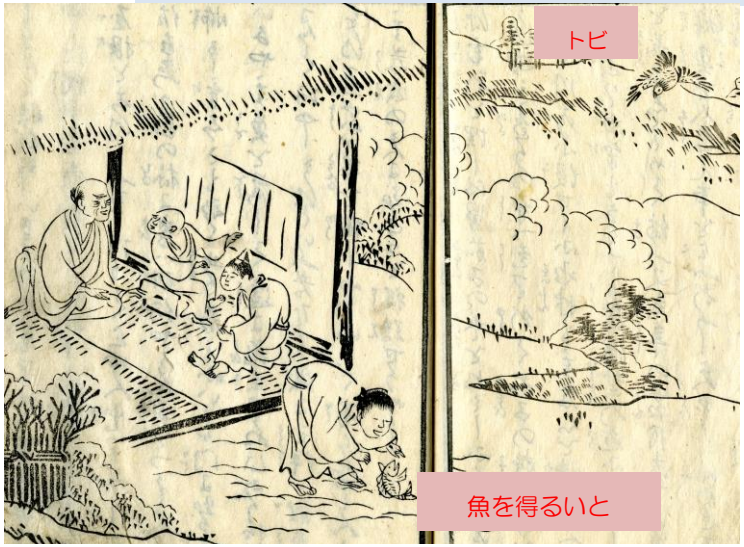
『若州良民伝』の世界

『若州良民伝』は、藩命により小浜藩士塩野伯篤が編さんし、京都の本屋・風月庄左衛門が 1781 年（天明元）年に刊行した、小浜藩領内の善行者（孝子・節婦・義僕・奇特人）70 余名の記録です。ここでは、『若州良民伝』に記録された人びとをふたり紹介します。



三方郡早瀬浦いと

いとは日頃、年老いた舅から道理に合わないことを求められますが、それでもよく舅に仕えていました。

海が荒れ、漁が行われない冬のある日、舅は鮮魚を食べたいといいます。いとは素直に舅の言うことを承け、門を出ると、不思議なことに一尺余りの生きた魚が足もとに落ちてきました。いとが門を出た時にトビが魚を落とし飛び去ったのをみた人びとは、これを怪しみます。

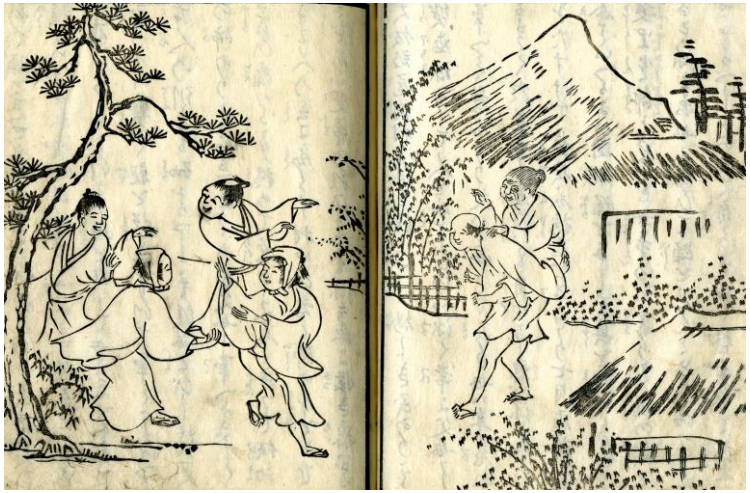
人びとは、寒中に王祥が鯉、孟宗が筍を得た古代中国の孝子の例に劣らないもので、いとの孝の心が天に通じたものとして称嘆しました。（『若州良民伝』巻之二）

大飯郡尾内村弥兵衛

弥兵衛は、歩行が不自由な母の介抱に昼夜心をつくしました。7 月に盂蘭盆会の盆踊りが行われたとき、母を背負い踊りを見せたところ、大変喜びました。母の死後は、父母に仕えるように姉に仕え、いたわりました。

弥兵衛の家は、西国巡礼の旅人が通るところにあり、足を痛めた老人やこどもをみてはこれを送り助け、加斗坂や勢坂などの険しいところでは、彼らを背負い坂を越えさせました。

このような母への孝、姉への慈、人への憐みの情を賞し、小浜藩は宝暦 11 年 12 月、米若干を与えました。（『若州良民伝』巻之二）



閲覧室机上に『若州良民伝』（2004 年　若狭路文化研究会、げんでんふれあい福井財団発行）があります。